

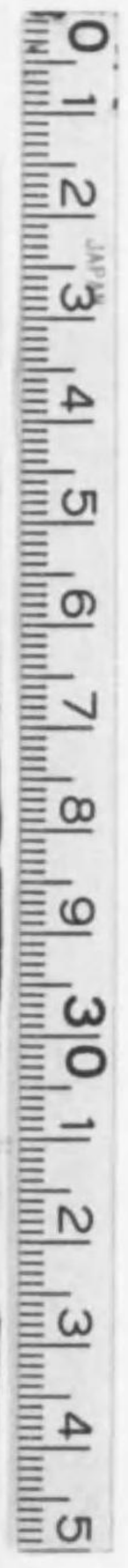
特279

77

原始文様集

第三輯

大正
13.8.11
内文



始



279
77

原始文様集

第三輯

大正
13. 3. 11
内交



原始文様集解説

第三集

(21) 瓶形土器

瓶形をなせし土器なるも、頸部に缺失あり。陸奥國津輕郡館岡村大字龜ヶ岡發見、龜ヶ岡は、龜即菟にして、土器類の多くを發見せしを以て知られ、東北地方に於ける有數なる遺蹟にして、かの東北地方に分布の遺蹟大なりとせし所謂磨り消し文ある土器は、一部學者には龜ヶ岡式土器の名を以て呼ばれしを以ても、遺蹟の大なりしを察知すべし本圖版のもの、亦即ち龜ヶ岡式土器の一なりとす。

文様は腹部に主として施されたり。即ち腹部の上下に平行せる帯文を刻し、上には更に二平行線を引き、丹念に篋先きにて刻せる點文をその平行線間におき、その内區に於いては、先づ地文を繩文となし、之に磨り消し文に普通見ゆる渦文を描き、その一端を細め、他端を著しく太くせり。而してこの分子の天地を交互に組みかへて漸次並べ、間を淺くはつて、繩文を消したり。本遺品は現存部高さ三寸二分、腹徑三寸八分。

(11) 第三輯 解説

(22) 壺形土器

口部に缺失あり。下膨れせる腹部のふくらみが、底部に於いて急にその膨みを收めしところに、緊張せる力を感じしむるものあり。口縁部は簡單に一凹線を彫りしのみ、頸部はよく磨いて素文となし、腹部にのみ、文様を施せり。而して此の種文様に繩文地を用ふるもの多きと異なり、素文地に凸文を以て曲線文を現せり。文様は、不均齊にして、之を組み立てし曲線は、屢々述べ來りし磨り消し文に多く見る双鉤文にして、不規則なるが如くにして、しかも一種の調和を感じしむるものあり。未だ奇幻の趣を脱せず、帶人文様の域に彷徨せるが如きもその巧みに空間を填充し行ける技術を見るべし。

(23) 甕形土器

口縁部が大様に、而して素朴に、僅か三四の突起をつけしのみ。文様は繩文地に、力強く凹刻の曲線文を描けり。而して描かれし文様は、極めて簡單に、先づ縁に沿ふて凹線三條を直に近く引き、之に直行して、下に二平行線を引き、これより二平行線を左に引いて、之を無細工に下にまゐり、右に出して、その右の上にもるめし曲線に接せしむ。

施文に當つて、土器作り者は、已の施文に巧ならざるを思ふて、窻先きに力を失ひしが如く、全體に於いて、緊張味を缺き、一種退嬰の氣を感じしむるものあり。外形はそのふくらみ緩にして些々の無理、何等の奇性をも感ぜしめず恐らく繩文土器としても、盛期を稍々降れるものとすべきか。

(24) 土器 殘片

日向國東諸縣郡綾村大字北後發見のもの、大正七年、文學博士沼田耕作及梅原末治の兩氏が遺蹟を調査せる際發掘探集せられたるものにして、今、京都帝國文學部の藏たり。九州南部の繩文土器の特色を見るべく、ここに收めたり。沼田博士は、かつて南薩傳宿發見の土器の文様を概述して、「素紋のものも時には存在するけれども、多くは曲線文様を附してある。即ち二條の波行線々を以て、紐繩を迂曲した様に、或は口縁に沿ふて、稍々直線的に適用し、或は渦線狀に、或は卷鬚的に各部分に適用してあること、亦た貝塚式土器に見る所の法式に一致してゐる。九州地方に於いて、此の土器の紋様に近いものは、日向綾村の遺跡から發見したものに認められる。」(京都帝國大學文學部考古學研究報告第六册) 參考として、本圖版にのせたる類の土器殘片を圖示せられ

たり。以て本遺蹟發見土器文様の特色を察知すべきか。

1は壺形土器の口縁部殘片なるべし。推定徑九寸、施文の手法、先づ太く深き沈彫の線を以て口縁に近づけて一條を引き、次にこれに平行しその下部に於いて一凹線を引き本土器片に於いては略ぼ中央に於いて、之を右下に巻いて上に受け、更に左下に巻き、再び直線となつて、餘ろに上にあがれり。而して別に一條を、最初に巻きたる頭邊に起して、口縁線に平行して引けり。恐らくこの線は、復た同じく巻曲線となつて、そこに一結節をつくるなるべし。前述せる口縁線に沿ふて、最下部に於いて一直線帯を引き、その上側に於いて、先きに漸次斜めにあがれる直線を受け、そこに山角をなすべく、再び斜めに漸次さがつて、巻曲線の下部の頭邊に終る線を引き、而してその山角に沿ふてその内側に更に一條を引けり。即ち全體としては、殆んど平行に近き二線を以て、所々に一結節を設けつ、施文せしに似たるが如き外見をなせるも、詳細に見れば、前述せる順序の下に、描けるものならんか。2もその文様の構成、1に略ぼ似たるものありて、之が更に稍々複雑になりしものと見るべきか。唯、結節部に於いて、卷くに多少異なりし手法を探れり。本土器は、推定徑一尺に近き壺形土器の殘片にして、縁五ヶ所に突起せる形のものあり。3も推定

徑八寸五分に近き壺形土器の殘片にして、更に又、結節部に於いて復雜となり、線の数を増せるも、施文の手法に於いては、前二者に似たり。4は推定徑一尺四寸、5と共に口部の僅に括れたる壺形土器の殘片なるが如し。文様は、述べ來りしものとは多少趣を異にし、4は小殘片にして、文様の全體を察知し難きも、平行線を不規則に結びしが如く、5は二平行線を無雜作に交錯せしめしものか。

(25) 筒形 土器

外形に於いて類品極めて稀なりといふべく、筒形をなせり。高さ五寸三分五厘、口徑二寸六分、口縁部に接して左右に耳あり、耳に小孔あり、紐を通して懸垂するの用に供せしがのち、腹部に於て最も細く、これより上下に徐ろに外にひろがりて安定をなすと共に、口縁部の耳の左右に張れるとよく合へり。文様は一種の磨り消しなるも、應羽地方に多くを發見せらる、ものと多少趣を異にし、彼れが曲線文を主とするに對して、これは全く直線文を用ひたり。即ち繩文地に直線を組み合せて文様を作り、その一部を磨り消したり。文様の太きとよく合へり。

(26) 壺形 土器

(14) 第三輯 解説

壺形土器としては大形といふべく、高六寸九分、腹徑七寸一分、而して大體に於いて形の完きを以て、優品の一とすべきか。口縁部に多少の缺失あるに過ぎず。形の大きし爲めならんか、上腹部に於ては、輪廓が凸曲線をなすすして、窄ろ内曲線となれり。この内凹みは腹部に於いて十分にその腹を張りしと協ひて引締れり。文様は口縁部に斜めに櫛齒狀に平行曲線を押し、その上縁窻先きを用ひて爪先を以つて押しつけしが如き文様を刻し、この手法を更に頸部及び腹部にも帶文として用ひたり。而して主たる文様は、腹部にあり、即ちその上下を三又は四本の並行帶文を以て刻し、内區を繩文地となし、これに大様にS字形の沈文を刻し、その上下に生じたる空間を填充すべく、そこに幾手文を刻せり。

(27) 鉢形及壺形土器

圖版向つて右の鉢形土器は、北海道釧路國(郡村名不詳)發見、薄手にして肌面粗、口縁部は一文字もなすず、波形をなし、四ヶ所に隆起せり。文様は繩文地を用ひず、波肌に向つて極めて亂雜に曲線文を描けり。亂雜のうち、一脈の原始味の拘せらる、ものあるが如し。高三寸八分、口徑三寸二分。圖版向つて左の壺形土器は、渡島國函館發見、

頸部を稍々缺けり。文様は腹部上半部に施され、一種の磨り消し文なるも、繩文地は不完全に施され、一部には之を缺けるものあるを以て、恐らく施文のこと終つて後に、繩文を所々に押せしものなるべく、又文様も東北地方に普通見るもの如く、曲線の自由に暢達せしものなく、極めて不細工に施せり。惣高さ四寸二分、腹径三寸八分。

(28) 鉢形土器

陸前國牡鹿郡稻井村大字沼津發見、鉢形土器なるも、文様の珍なるを採る。繩文地既に見あらし。而して直線を用ひて、大様に文様を描き、これを廣く帯取つて、中を磨り消せしを以て、目あらし繩文地によく鈎合へり。粗朴の中に、借調を覺えしむるものあるが如し。鉢の口径五寸。

(29) 土瓶形土器

注口を缺き、釣手を缺けるを以て、外形の美は甚しく損ぜられしも、褐色の地の上に赤く塗れるを珍とすべし。赤色は幼児の好むが如く、原始人も好んで之を用ひしもの、裝飾に往々用ひしものあるも、本土器の如く全面に之を塗れるものは蓋し稀なるべし。文様は腹面に沿ふて、曲線を往來せしものならんも、素朴の裡に拘すべき味あり。高さ

三寸九分、腹径三寸四分、底径一寸四分。

(30) 土瓶形土器

常陸國稻敷郡大須賀村大字福田の貝塚は、豊富なる遺物を藏し、學者の間に著聞せらる、遺蹟なり。本遺品は、高島多米治氏によつて發見せられしもの、型式より見て頗る注意すべきものあり。本遺品は型式の分類よりいへば、土瓶形土器と稱せらる、ものなるも、全體は顔面を現し、普通の土瓶形土器の如く、上部に口を設けず、後頭部に横に口を開けり。注口を缺失す、總高さ五寸八分。

顔面の表情、普通の土偶に見る奇幻的の趣をば多く失ひ、多少現實的の感を抱かしむるものあり。文様は腹部にのみ施されたり。即ち腹部の上下に於いて平行の二凹線を引いて區劃をなし、その内區に、繩文地を磨りへらして、波頭の如き渦文を太く描き、之が尾を長く巻いて、次の波頭の上に重ね、以て文様を繰返し、地を残しては、波頭文の上を磨り消したり。即ち一種の磨り消し文なり。文様、亦奇怪の趣を多く存せず、丸く柔き感と與ふるものあり、顔面の稍々現實味を帯びたると、相照應せるの感あり。

器 土 形 瓶
(見發掘之龜字大村西館部御津國典)

21



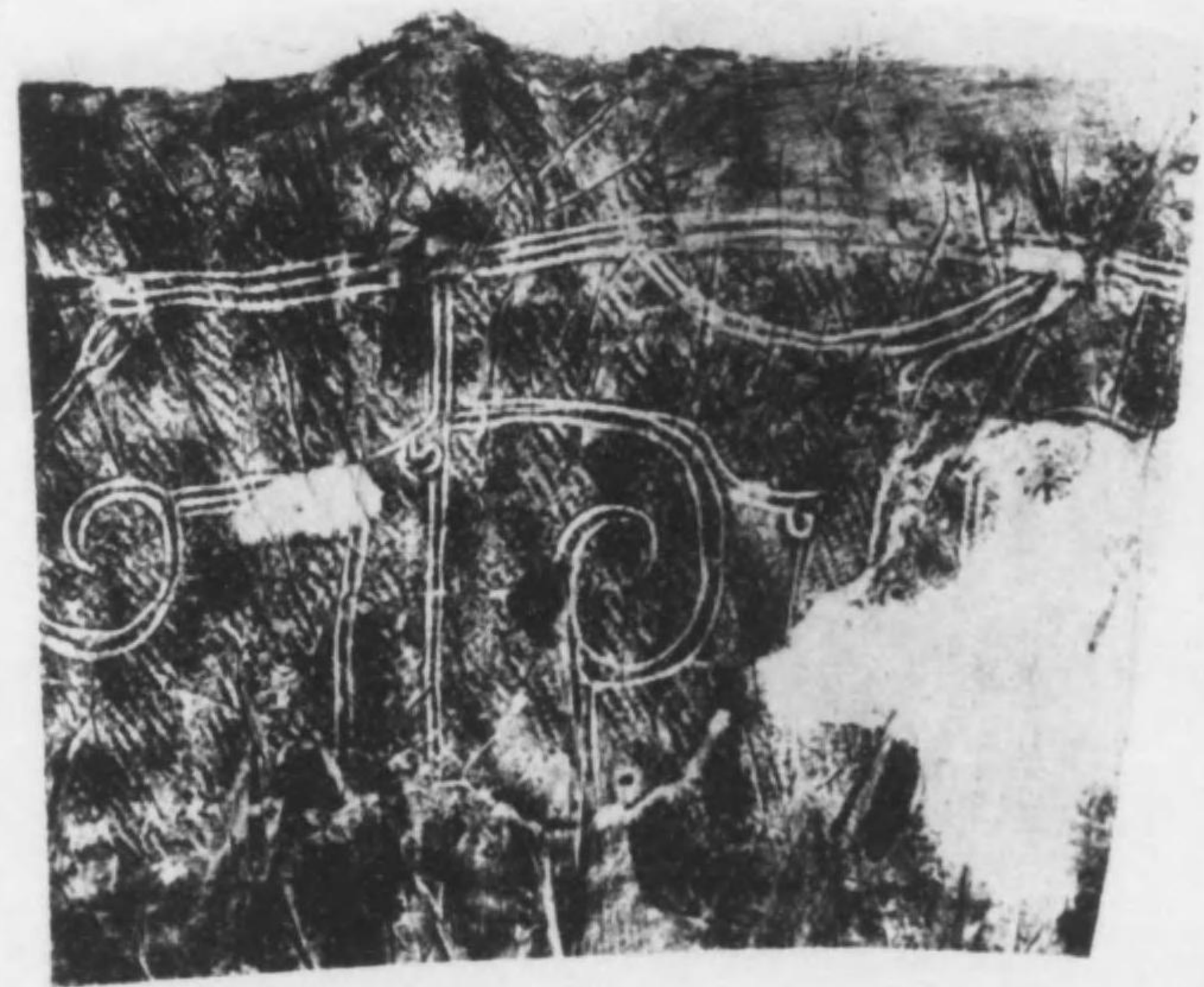
(東京帝國博物館藏)

壺形土器
(亦見發國與陸)



(藏所氏正和佐)

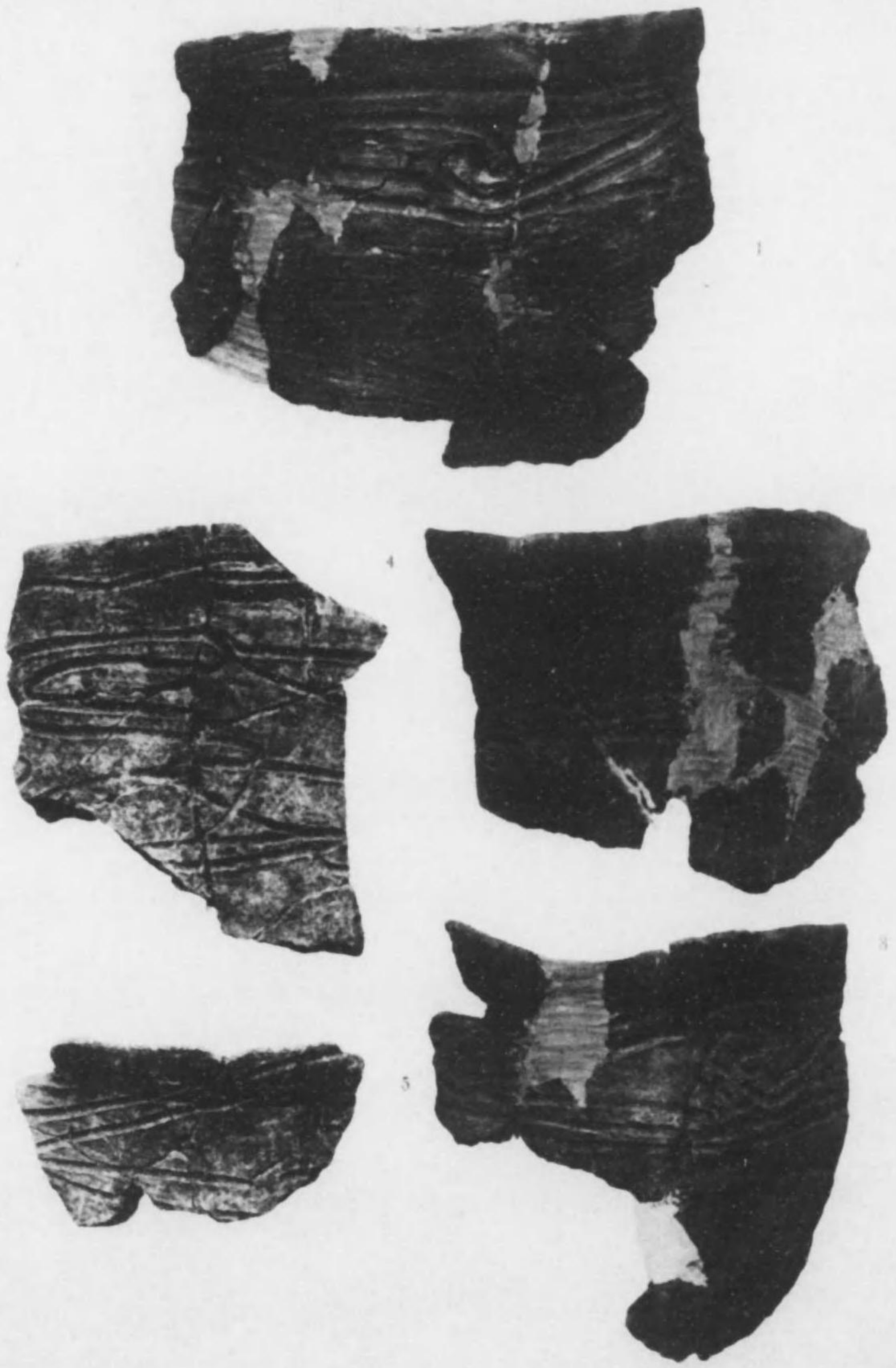
器 土 形 甕
(見發遺代田字大村遺供部宛社國約陸)



(藏氏七部錄遺)

片 殘 器 土

(見發村綾郡性清至國向日)



(藏部學文學大國帝都京)

筒形土器
(東發源町字大村元國郡内河國野下)

25



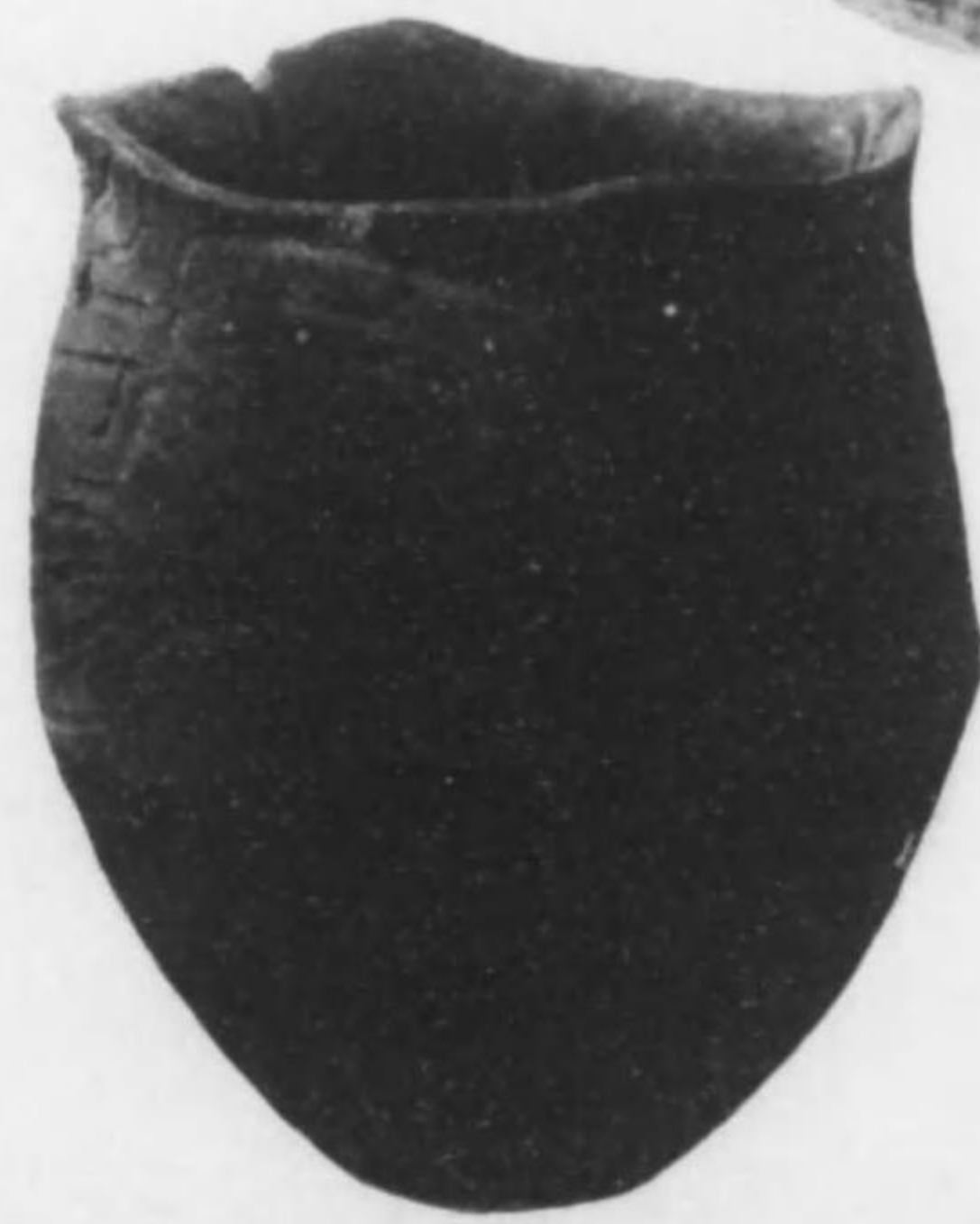
(藏宝教學類人學大國帝京東)

器 土 形 壺
(見發村川郡市帝國志談)

26

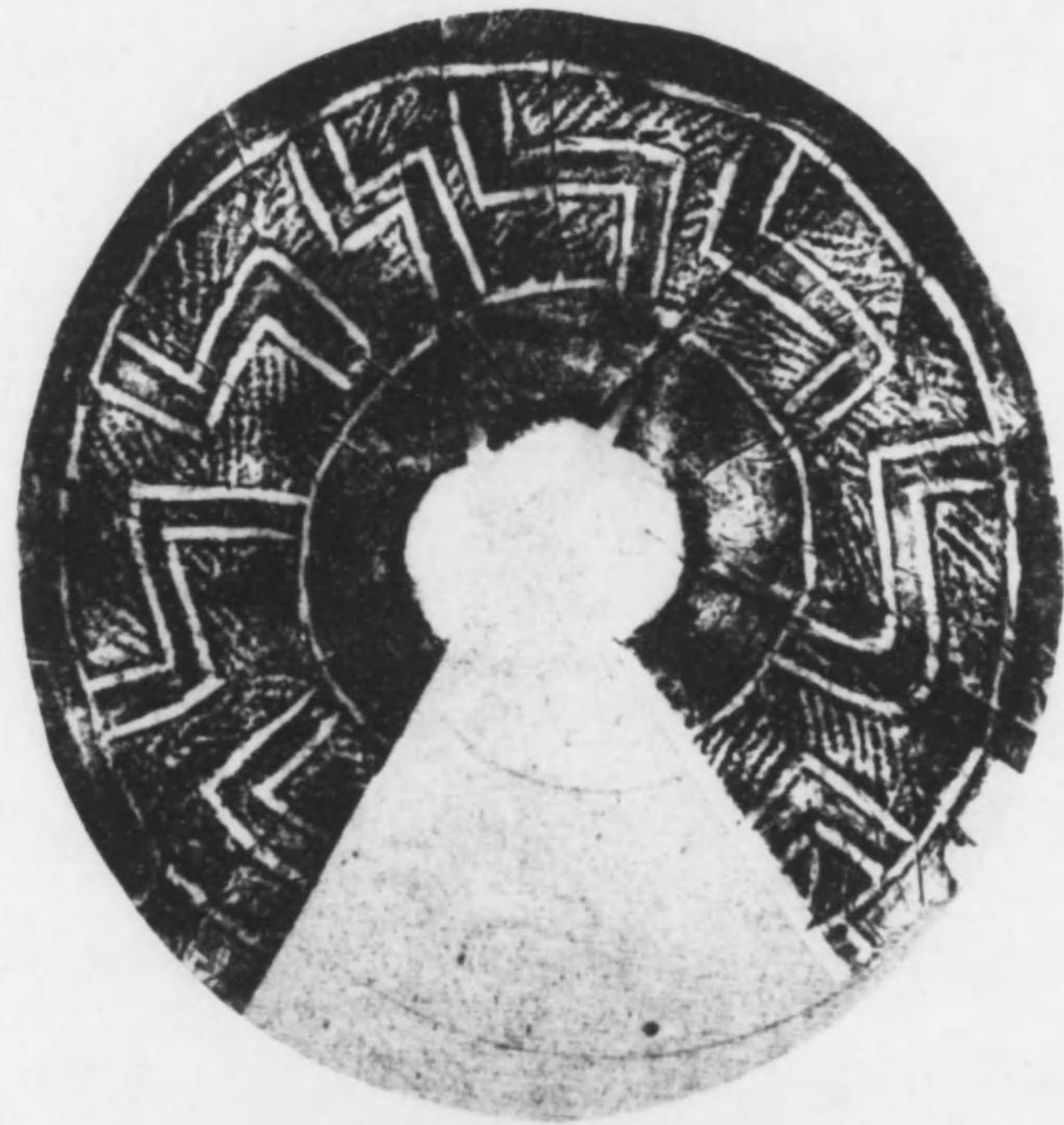


(藏於東京帝國博物館)



器 土 形 鉢

(見發津區字大村井松郡鹿社國南畿)



(藏氏部七種利毛)

器土形瓶土

(北盤野野金堂字大村岡四部部書東國總下)

29



(藏氏申貞羽上)

器土形瓶土
《見發台師樂字田福字大村其頭大郡款和國法繁》



(藏會濟共都下)

終

大正十三年二月二十日印刷
大正十三年三月廿一日發行

編輯者 杉山壽榮男
發行兼印刷者 工藝美術研究會
右代表者 田村壯次郎
東京市牛込區矢來町三番地

印刷所 大塚巧藝社
東京市本郷區湯島四丁目廿番地

發行所 工藝美術研究會
振替東京四一〇二四番
振替長野三五二一番

不許複製